

文芸研ニュース

2022年5月6日

—NO. 160—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



5月1日 熱き東京 BMS

巻頭	辻委員長より	1
第56回オンライン全国大会に向けて		4
大会事務局の裏側		5
サークル便り(豊中・東京・道東より)		10
青年学校便り		14
事務局通信		15
事務局員の妄想日記		16

戦争・政治を日常的に語り合う学校に

委員長 辻恵子

ウクライナ侵攻と子ども・教師・学校

◆二〇二二年二月二四日―この日に起きたこと―
未だに悪夢ではないかと思われるロシアのウクライナ
侵攻に終わりが見えません。日々、激しい戦闘の様
子や殺戮の現場が生々しい映像で届く中、核兵器使
用の危険も報じられています。

でもそんな戦争について職員室で、あるいは教室
で話題になっているのでしょうか。「新学期の多忙さ
にそれぞれのところではない」としたら、立ち止まって考
えてほしいのです。

まず、子どもにとってはどうなのか。凄まじい爆
撃、瓦礫の山と化した街、傷つき命を落とす人、涙
を流す人：毎日そんな映像を目の当たりにして、不
安定になってしまいうち子どもがいます。強烈な刺激に
敏感で、いつの間にか心に焼き付いた映像の断片を
夢に見たり、フラッシュバックしたり、自分でもよ
くわからないうちに涙がこぼれたりするので。小
さい頃、わたしも恐い話を読んだり、絵を見たりす

ると、いつまでも忘れられずにうなされる子でした。また学級担任だった時、5年生の子が9・11の同時多発テロに怯え、「夢に見てしまった」「なんか、急に目に浮かんでくる」「怖くて胸がドキドキする」と話してくれた事もありました。リアルタイムで見る衝撃的な映像を受け止めきれないのです。

政治的な話題を持ち込むではいけない、そう思っ
て話さない教師がいます。自分の考えが正しいとは
限らないから扱えない、そう言う教師もいます。で
も、それは、不安を抱えた子どもを身捨てているこ
とです。「正解」を教えることなんかできないし、
必要ありません。そうではなくて、同時代人として、
子どもが一人で受け止めきれない問題を共に考え、
語り合うのが教師です。「おかしい」「酷い」「許
せない」という思いが共有され、どうすべきか、ど
うありたいかが話題になれば、子ども達はどれほど
安心できるでしょう。大人への信頼を築くことにも
なります。そして次第に認識を深め、自分なりの判
断や批判ができるように成長していきます。どうか、
生きた学びの機会として教室で話題にし交流して、
その根っこを育むよう努めてください。話し合いな
がら、教師もさらに学んでいけばいいのです。
◆それとは別に、職員室で今戦争が話題にならない
としたら、その政治的無関心と同調圧（自己規制）

は大きな問題です。「政治の話なんかしたら偏つて
と思われてしまう。」「本来「政治的中立」が教
師の姿勢だ」そんな意識が若い先生達の中にあるの
かもしれません。

前委員長の上西氏が「文芸研ニュース」138号
に「戦争は教室から始まる―教え子を再び戦場に
送らない―」を書いたのは二〇一五年、戦
争法案（安保法制関連法案）が衆議院で強行採決さ
れそうな情勢の最中でした。文芸研として声明「戦
争法案（安保法制関連法案）の衆院での強行採決を
断固糾弾する」を出した時です。その中で上西氏は、
SEALDsの活動や安倍政権批判を語り、それと同時に
「学校現場の政治的無関心と自己規制（同調主義）
を克服しなくてはならない」と述べています。それ
は、日々の実践にもつながることとして、次のよう
に締めくくっています。

「昨今の文芸教育や作文教育の否定は、子どもたち
の想像力や認識力・表現力を育てることを阻害し、大
学教育における芸術や人文科の切り捨てと併せて、民
主主義の衰弱・否定につながることにものと危機感を
もって欲しい。『教え子を再び戦場に送らない』ため
に、子ども達の道徳的良心を鈍磨させない文芸教育・
作文教育の灯を灯し続けなければならない。民主主義
は、認識力（批判的思考力）と想像力（心情や願望、

欲求を理解できる共感能力)を有している能動的・主体的な市民なくしては存在しない。」

上西氏の指摘を待つまでもなく、教師は「政治的中立」でなどいられません。人権・平和・愛・連帯というような人類が求め続けてきた価値観を土台に認識力・表現力を育てる教育でなければ、民主主義の担い手として子どもを育てることはできないのです。もっと危機感をもつて欲しい、その言葉を改めて噛みしめています。

◆ロシアの侵攻に対して徹底抗戦しているゼレンスキー政権やウクライナ国民。その姿勢への共感から、「他国から侵略されたら徹底抗戦するべきだ」という声が強まっています。それが「日本の平和は大丈夫だろうか」という形で問い直され、岸田首相は「敵基地攻撃能力の保有検討」も選択肢の一つ、と言いました。

え、ちよつと待つて。専守防衛じゃなかったつけ？敵基地を攻撃するのは防衛の範囲外では？そうしないと防衛できないなら仕方ない？

さらに「そもそもウクライナが核を放棄したことが間違いだった」という意見までもが、聞こえてきます。でも「戦うべきか、否か」は問題をあまりにも単純化しすぎていますし、「核を保有すべきか、否か」は、もし核兵器が使われたらどうなるか、引

き起こされる惨禍を考えればとんでもない話だとわかるはずです。しかしヒロシマ・ナガサキのあるこの国で、そんなわかりきったはずの話が出てくるのです！非核三原則は一体どこにいったの？

◆参院選の公示まで2か月余り、戦争のできる国になりはしないか、「教え子を再び戦場に送る」ことにつながりはしないか教師として、いやその前に一市民としてしっかり見、考えていきましょう。ブレイディみかこ氏の「ぼくはイエローでホワイトで、ちよつとブルー2」では、二〇一九年の英国総選挙で保守党が大勝利した同日、息子さんの中学校で「スクール総選挙」が行われたそうです。学校内の投票所で全校生徒が投票したいわゆる「模擬投票」ですが、労働党が圧勝しました。そこに至るまで、生徒たちはシテイズンシップ・エデュケーションの時間に各政党のマニフェストを先生と一緒に読んだとのこと。マニフェスト全部は無理なので、NHS（国民保健サービス）・EU離脱、教育、気候危機の4つの分野に絞って政策を読み、みんなで話し合ったのだそうです。

わたしたちは、もっと選挙に関心を持ち、（これが大事なのですが）人と語り合わないと、この中学生にもかきませんね。

作文指導の実践を記録として残してください

全国大会を成功させましょう

◆文芸教育127号の特集「どうしてですか?『書くこと』の指導」の原稿を書くにあたって、退職し学級担任をはずれている身なので仕方なく過去の自分の実践をあちこち振り返りました。それはそれで、新たな発見もありますが、「ああ、今の実践を読みたいな」と切実に思います。松戸サークルのメンバーは時々学級通信や日記を持ち寄るのですが、皆さんのサークルではいかがですか。作文指導に関しては、文芸教材や説明文教材のように、毎年多くのレポートが集まるとはいかず、実践記録の少ないのが残念ながら全国的な傾向です。何とかそこを打破し、作文が(とりわけ作文の授業実践が)文芸研の財産になつていくように取り組んでください。

「うちのサークルでは作文を読み合っているよ」「作文の授業を報告したよ」という声を聞きたいし、そうやってほしいものです。もし、今すでにそういう活動をしていたら、ぜひ教えてください。

さあ、自分の作文指導をどうするか、ある程度年間の見通しを立て、少しずつ実践の記録を残していきます。必ず子どもの力になり、自分自身の力にもなります。その記録をどこかで報告してもらえたらいいなあと願っています。

◆昨年は、なんとと言ってもはじめてのオンライン大会ですから、「何よりも運営をしつかり!無事に出来ることが大事」でした。幸いにして、皆さんの力を結集し大きなトラブルもなく、大会を終えることが出来ました。

その昨年の成功をふまえ、「今年度はオンライン大会が無事出来ればよい」だけでなく、よりよい内容にしていきたいものです。何をどう伝えるか、また参加者の疑問に応え、なるほどと納得させられるか、じっくり取り組んでください。そして、提案者は各サークルでぜひリハーサルをしてみてください。それがそのまま、それぞれのサークルの学習になりますし、提案者にとつてはよりよい提案に練り上げていくことになります。対面形式の時は、レポートができあがれば後はそれなりになんとかなりましたが、オンラインでは、「レポートのできた今、ここが半分」そう思つて準備をしましょう。

そしてもう一つ。多くの人に参加してもらえらうに広報にも力を入れてください。各地の学習会に一度でも顔を見せてくださった方には、必ず全国大会への参加を呼びかけましょう。あわせて「文芸教育」の読者拡大もよろしく願います。

全国大会事務局より

全国大会成功に向けて

山口東サークル 酒井大輔

全国大会実行委員長。気がついたら、なっぺいしました。

・そんな大役、自分に務まるだろうか？

・うちの娘も4月から1年生。いろいろ手をかけてやりたいなあ。などなど、様々なことを考えました。

でも最終的に思い出したのは、青年学校の親睦会で上西先生や野澤先生が話してくださった「役割が人を育てる」というお話でした。これを成長のチャンスとして頑張っていこうと思いました。また、せっかく実行委員長にしてもらったのだから、その期待にも応えたいと思いました。

全国大会では、各地の先生方の深い教材研究をもとにした、すてきなご実践がたくさん発表されます。毎年全国大会に参加するたびに「二学期には子どもたちとこんな授業がしたい！」と元気をたくさんもらっています。実際の授業の様子も分かかってイメージしやすいので、もっとたくさんの先生方に知っ

てほしいなと思っています。今回もオンライン大会です。現地が集まる大会に比べて金銭面、場所、時間などによる制約は少ないので、参加もしやすいかと思っています。これを機に、多くの人に文芸研を知ってもらって、興味をもってもらえたらいいなあと思っています。

そのために、今年は大会事務局の7名の先生方をお願いして、FB、こくちーず、センセイポータルなど様々な媒体で宣伝していただこうと思っています。みなさんもぜひひびひ、多くの方に声をかけてもらって、大会を盛り上げてもらえるとありがたいです。

そして、ものごとを本質的に考えられる子どもたちが少しでもたくさん、育っていつてくれたらいいなあと思います。

全国大会成功に向けて、みなさまのお知恵、お力を貸していただきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。



初のオンライン全国大会を終えて

大会事務局の裏側

東京サークル 西真由子

「昨日の全国委員会で全国大会をオンラインにする際のプロジェクトチームを作ることになりました。吾郎さん・尊生さん・倉富さん・西さんの名前があがっていました。依頼があると思いますが、よろしく願います。」

上西先生からそんなメールが届いたのは2021年1月5日朝5時のことでした。

そして翌週には「プロジェクトチームの皆様」という宛名で「前回の全国委員会で、オンラインでの大会を見据えて、出来る事、課題、著作権なども含めてまずは、プロジェクトチームを立ち上げる事になりました。まずは、みなさんがオンラインでの大会、対面+オンラインでの大会をするに当たって、考えられることを出来るだけ沢山出しあい、絞っていききたいと思います。」というメールが事務局より届き、かくして（本人の意向の確認はされないまま（笑））、私は全国大会オンライン化プロジェクトチー

ムの一員になったのでした。

山中吾郎さん・山中尊生さん・倉富さん・酒井さんとの計5名のプロジェクトチームによる3回のZoomミーティングと、3月6日の全国委員会を経て、20日のサークル代表者会議にて、2021年夏のオンライン大会が決定しました。それに伴いプロジェクトチームはお役目終了となりました。

余談ですが、著作権問題は課題が残り、絵本入門講座は開催を見送ることとなりました。そのため私はレポーターとしてのお役が御免になり：おかげで、裏方として大会運営に尽力できる環境が整ってしまっただけでした（笑）。そのため、気づけばオンライン大会の事務局として、新たなお役目がスタートしていたことを記しておこうと思います（しつこいですが、（笑））

大会事務局のZoomミーティングは、手帳に記入があつたものだけでざっと16回。会議は平日22時から始まり日付が変わるまで開催したこともあり、その合間に各自割り振られた作業をし、こまめにLINEで相談をし：大会までの3ヶ月は、通勤時間も昼休みも、作業や連絡に費やした、文字通り文芸研一色の日々でした。

初めてのオンライン大会に向けて、どんな検討が

必要だったのか。裏方事務局の様子を、今年度以降の検討の一助となればと思い、皆様にも共有させていただこうと思います。

事前準備としてPeatixのアカウント取得・Yahoo!アドレスの取得を済ませ、5月16日…大会事務局発足・大会資料共有の媒体の検討(GoogleドライブかDropBoxか)開始、22日…Peatix運用の確認・チラシ作成、30日…会員内Peatix仮運用開始・レポート共有試し・チラシ最終調整、6月4日…Peatix番サイト事務局内共有・Peatixの使い方の説明作成、5日…Peatix最終確認・チラシ最終確認・今後の日程の確認、6月9日…会員限定Peatix申し込み試験運用、9日…QRコード動作確認・チラシ完成、12日…チラシ3枚目Peatixの使い方の説明完成・Peatix申し込み状況の全国委員への共有、14日…一般申し込み開始、20日…予算案作成、21日…今後の課題の確認(レポート・事前ポイント・Q&A・資料共有ドライブ・会計・司会提案者・ホストの打ち合わせ・Zoom操作マニュアル・当日の動き)。これ以降、全レポートの体裁を統一したり事務局の打ち合わせ内容はレポートについてがメインになっていきました。7月4日…当日の各分科会ホストのLINEグループが発足、事務局

の仕事と並行してホストの視点からの検討が開始。7月18日…レポートをGoogleドライブにアップ、22日…会員内にてZoomウェビナーの動作確認・申し込み者への資料送付開始、31日…大会前日に各分科会のZoomリンク先の送付。

初めての試みだからこそ、全ての行程を事務局みんなで共有、検討して進められたのはとても安心できました。

色々と比較検討し、今大会ではPeatixを利用してのチケット販売・資料送付・参加者への連絡を行うことを決めました。

採用した一番の利点は、チケット販売に関わる会計作業までが一切お任せなことでした。また、チケットの種類毎にソートがかけられ、資料送付が一括でできる点でしたが、これは欠点との表裏一体の機能でもありました。なぜなら、申し込み時での範囲指定ができないため、ソート機能を用いて資料を送付した場合、早期に申し込みがあった方には、何度何度も同じお知らせが届いてしまうことになるからです。そのため、対応策として資料送付を7月20日頃と定め、できるだけそれまでのお申し込みを呼びかけることとしました。

6月14日に申し込みの受付を開始してから、28

日…50名、7月5日…66名、17日…92名、そして20日時点で117名でした。この117名については、各チケット毎にソートをかけ、一括での資料送付ができました。全12講座、12通分の作業です。しかし、最終的な申し込みは185名だったため、20日の資料送付以降にお申し込みのあった68名については、毎日毎日申し込みのある毎に、1人につき選択された3講座分のメールを計204通対応することとなりました。また、参加者も慣れないPeatixでの申し込みですからチケットの購入ミスもちろん何件もあり、日々チェックをし、こちらも1件ずつメールでの対応をしました。

大会運営の中で、この作業が一番時間と労力を取られた作業だったと思います。残念ながら、文芸研の会員の中にも7月20日以降に申し込みをされた方がたくさんおりました。事務局の負担軽減のため、今年度の申し込みはぜひ、ぜひぜひ！資料送付日までにしていただけますようご協力をお願いいたします。

そして大会前日、代表者会議を開催している裏で、当日のZoomリンク先を送付すると共に、念のため送付済の資料の確認も再度しました。結果として、夜、就寝ギリギリまでメールを確認し、その都度資料が見つからない等のSOSの対応が必要となりました。

した。もちろん！当日の朝も(笑)。

私的には、万全に対応したつもりでした。しかし、しかし、予想を上回る強者はいるもので…当日の開会挨拶をしている間にも「資料が見当たらない!!」という問い合わせがあったり、分科会が始まってからも「資料を削除してしまい、再送してもらえますか!!」というSOSがあったりもしました。自身の、トラブル想定範囲の狭さを感じた時間でした。運営サイドはもちろん初めての開催方法でんやわんやでしたが、事務局は精華小に集まり、リアルで場と時間を共有し共にトラブルに対応できたことが、とても心強く、安心できました。一方、参加者の皆様にとっても、Peatixでのチケット購入が初めての方、Zoomの利用が初めての方もいたわけで、それもすぐ隣に助けを求められない各々の場からの参加であり、きつと不安を抱えて参加された方もいらしたことを思います。運営側も、参加者も、それぞれ不安を抱えながらの初開催であったにも関わらず、特段大きな問題もなくやりきれたことに、大きな安堵を得たと共に、参加者皆様のご協力に感謝を申し上げます。

余談ですが、ちよつと時間を遡り…自身の話を。

コロナ禍に陥った2020年、東京サークルでは3月から学習会が中止になりました。コロナ禍が明

ける様子もなく先行きが不透明な中で、これはオンラインでの開催を模索していく必要があるなど思い、当時注目が集まりだしたZoomの使い方講座に、お金を払って参加しました。4月20日のことでした。その後両親と弟妹を巻き込み、Zoomの様々な機能を試し、6月はZoomにて東京学習会を開催することを決めました。学習会の事前準備として、5月末の夜にサークル内でZoomの利用お話し会もしました。

6月の学習会には、オンラインでの学習会の噂を聞きつけて、愛媛からも参加者がありました。7月はリアルでの開催が可能ということになりましたが、愛媛の参加者から、ぜひ今後も参加したいとの声があり、ハイブリッドでの開催をすることとしました。東京学習会BMSでは会員からも参加費を徴収しているため、オンライン参加者からの参加費の徴収・資料の送付の点からPeatixの利用を検討し、使い方について調べ、6月中に申し込みペー지를作成。見事7月の学習会からハイブリッドでの開催に漕ぎつけたのでした。

その過程から、2021年度大会のプロジェクトチームにお呼びがかかったわけですが、私は決してICT機器に強いわけでも、詳しいわけでもありません。自前のパソコンを購入したのも2020年の3月です。何を買ったら良いのかわからず、FBに

て「どのように選べば良いのかわかりません！お薦めがあれば教えてください」と助けを求めた人間です。もちろん、中学生からパソコンの授業があった世代なので、親の世代に比べれば、身近なツールであることは確かですし、職場でもパソコンは使用してきましたが。

何が言いたいかと言いますと、「できるからやる」のではなく、“やる必要があるから、できるようにする”ことが大切なのではないかということです。

今年度は各サークルから募ったメンバーで構成された大会事務局が、既に動き出しています。今後また会員の皆様には、分科会のホスト等協力の依頼をしていくことと思います。“今”できないからやらないのではなく、今年すぐには難しくとも、来年以降まだまだ先がありますし、少しずつ皆がいろいろなことを身につけていって、レポーターも含め、一部の人の負担と力で賄うのではなく、皆で少しずつ請け負って、会員皆で協力して運営していけたらいいなと思います。自身にできる協力の形について、ぜひ、頭の片隅においておいて、機会があった際にはご参加いただけたら嬉しいです。

今年度の大会も、素晴らしい時間にして参りましたよう！

サークル便り

なんでこうなる?!うちの学校の国語研究

大阪豊中サークル・朝輝千明

私は今の小学校に7年間勤務していて、学校の研究は「説明文」です。

ですが、国語の研究授業に対する同僚の姿勢が「なんでこうなるの!!?」と言うことの連続です。私も意見を言いますが、説得しきれなくて、自分の勉強不足に情けなくります。

例えば

①そもそも先生どうして全然教材研究をしないで、何時間も目当てや授業の流れの話をする。

②“教材の魅力¹¹すごい!面白い!”を教師が感じられていない。

③授業で、本文を全然読み込んでいないのに、書き込みをさせる。

④『物語は将来、趣味でしか読まない。説明文はプ



in 野澤智子さんの別荘
枚方サークル恒例、GWのバーベキュー。久々に開催。ポケとツッコミの応酬。我々の笑いに休みは皆無。

レゼンで必要だから大切』と会議でベテランが言う。愚痴になってしまいましたが、本当に「なんでやねん!」と思うし、それを通り越して一瞬かたまってしまいます。先生自身が教材研究して、魅力を感じたり、そもそもの物語や国語の価値を感じることが大切やとしみじみ思っています(うちの職場はヤバすぎて、これじゃ子どもに力はずかんし、先生の危機的状況が恐ろしいです。

「子どもの文章表現をどう読み合うか」

という研究に取り組んで

東京文芸研 伊野 文子

昨年度、一年生から六年生までの担任十二名で、「子どもの書き綴った作品をどう読むか」ということを考えてみよう、ということになりました。本校は、検定教科書を使わず、自主カリキュラムを作って取り組んでいます。どの教科でも、授業の中で「やったこと」や「みつけたこと」、「分かったこと」「自分の考え」など、自分の言葉でまとめる、ということを、大事にしています。とりわけ、国語のカリキュラムを見ると、「書き綴る」という領域では、一年生から六年生まで「今日の目玉」や「日記」に取り組んでいます。そのような積み重ねの中で、六年生では「十二歳の主張」という、自分の考えをまとめる文章にも挑戦します。

これまで、私は、子どもの文章に対して、感想を書いたりするだけでは教えたことにならない、と思いい、「こんなふうに書いたらいいよ」と赤ペンで訂正したり、削除したりしてきました。このような関りで、子どもは書くことが好きになり、子どもの書

く力が高まるのかどうか疑問に思いながらも、そうしていました。

時を同じくして、文芸研の「ものの見方、考え方」と本格的に出会い、全国大会にも参加するようになりました。そして、数年前の文芸研の全国大会で、作文入門講座に出て、目から鱗でした。それは、子どもの書き綴った文章を認め、深く意味づけて、子どもに返している実践でした。子どもの内面と文章表現を結びつけて、温かい目で子どもを見つめ、生き方を励ます意味づけをしていました。私は、自身の取り組みを恥じ、どうしたら、このような意味づけができるようになるのだろうか、と思い、その後、全国大会の作文入門講座で学びながら、東京文芸研学習会に参加していました。そのような課題意識を持ちながらいたところ、昨年度、東京文芸研学習会で、子どもの日記をどう読むかという学びの機会があり、その時にレポートされた東京の青梅市にある小学校の二年生の「日記を読み合う校内授業研究会」に参加させていただくことができました。このような取り組みを目の当たりにし、背中を押されて、明星学園でもやってみよう！ということになりました。

まず、私たちが子どもの文章表現をどのように読むかということが大事なので、研究会を重ねました。

上西信夫氏を共同研究者としてお招きし、一年生から六年生までの文章を、担任十二名で「ああでもない」「こうでもない」と意味づけていきました。最初は、子どもの文章表現の足りないところに目が行きがちでしたが、上西氏から子どもの作文を読むときの視点として①書いた子が一番言いたいことは何か（主題）②目的意識③相手意識を読むことだと教えていただきました。そのためには、文章に「題名」をつけさせることが大事で、そのことによって、低学年の子どもであれば、主題意識が芽生え、観点はつきりする、ということ。中学年であれば、象徴的な題名をつけること。高学年であれば、効果的な題名をつけることがねらえるということ。また、子どもの文章表現から伝達性（言いたいことが言い切れている）と虚構性（書き手が意図していないけれど表現されていること）を読むということ。上手い作文を目指すのではなく達意の文章を目指すこと。上手い作文を目指すそうとすると筆が進まない子が出てくるということ。等々、私たちが学びながら、子どもの文章表現の見方を創っていきました。

そして、どの学年の子どもたちにも、①主題意識をもつこと、②文章の『仕組』を意識すること。③『対読者意識』をもつこと（『仕掛』を意識する。）、④『説明』『描写』『会話』を書いてみることを意

識するように、働き掛けました。何より、子ども同士で文章表現を読み合う際は、『共感的に読む』ということを最も大事にしました。どの学年でも、クラスで子どもの文章表現を読み合う授業をしました。一年生から六年生まで、書き手はクラスに受け入れてもらえたという安心感をもち、読み手は、書き手の個性に出会うことができました。

今年度は、文学作品や説明文を読むということと、子どもの文章表現について、考えていきたい、という声があがっています。授業で子どもと一緒に、文学作品や説明文を深く読み、意味づけながら、表現の工夫を子どもたちと見つけること。そして、子どもたちが自分の表現したい内容を書き表すときに、それらが助けになるような授業を目指して、精進していきたいと思います。引き続き、東京文芸研のみなさん始め全国のみなさんとながつて、学ばせてください。よろしくお願い致します。

あたたかい職場づくりから、学習会へ

北海道文芸研道東サークル 斎藤鉄也

組合の専従を終えて、4月から待望の現場復帰となりました。組合専従のために現場を離れることは

苦しい決断でしたが、西郷先生の言葉「龍は嵐を呼んで天に昇る」を今こそ実践するときだと考えました。

とても小さな組合ですが、「マイナスをプラスに転化する主体性」を意識し、小さいからこそできることを積み上げて、世の中に大きな影響を与える数々のうねりを作り出したと自負しています。「自己と自己をとりまく世界をよりよく変革する主体に育てる」文芸研の学びは、教室を離れても大いに役立ちました。大会に組合専従分科会ができたなら、ぜひ実践報告したいです😊

さて、念願の現場復帰でしたが、現場は想像以上に厳しいものでした。「働き方改革」のため、朝の打ち合わせがありません。職員会議は簡素化されていて、学校がどのように動いているのか全く分からず、机の上には厳しい言葉の置き手紙がたびたび置かれています。

子どもにも同僚にも威圧的な雰囲気がある職場で、あたたかい雰囲気を作っていくことは、子どもにとっても若い先生にとっても喫緊の課題であると感じました。

まずは担任する教室であたたかい学びを丁寧につけていくことを心がけました。すると、若いS先生がたびたび教室に来るようになりました。S先生は、

まるで「指導力不足」であるかのような厳しい「指導」を同僚や管理職から受け続けてきていたのですが、とても素敵な感性を持っており、子どもや保護者からの信頼があつい先生です。授業作りや教室掲示、学級便りの書き方など、放課後に話をするようになりました。

8月からは、校内で自主研修を始めました。管理職や保健室の先生も含めて、多くの先生が集まり、子どもや授業について語り合いました。そうして、子どもへのあたたかい見方が職場での市民権を得て、職員室でも気兼ねなく子どもや授業の話ができるようになっていきました。

S先生は、特に国語の授業作りについて学ぶ場をもとめて、町教委主催で毎月開催されている若手教員の学習会で私の実践報告をする機会を作ってくれました。また、国語の授業作りを学びたいというS先生の友人と食事の機会もできました。そこで、3学期から、定期的に国語の授業作りについて学習会を行うこととなりました。

土日はたいいてい組合の会議や集会が入っており、日程調整が難しかったため、2月6日によりやく第1回の学習会を行うことができました。地域のユースゲストハウスを借りて、食事をしながら行いました。学習会では、これから授業に入る1年「お手がみ」、

2年「アレクサンダとぜんまいねずみ」、4年「木竜うるし」について、ともに教材分析と授業プランを考えました。次回は、3月に、それぞれの授業の様子を交流することとなりました。

まだ会の名称も決まっていませんが、いずれ、文芸研のサークルとしての学習会に発展させていきたいと考えています。広い北海道で、60kmも離れたところから来ている先生もいますので、参加してよかったと思える学習会をめざしてがんばります。



青年学校便り

つながり、学び合う青年学校

文芸研山口東サークル 大田 晃司

教職に就いて十五年。子どものよさや可能性を伸ばしたいと考え、日々の教育活動に励んでいる。現在は、四年生の担任として、そして二児の父親として、奮闘中の毎日である。

文芸研との出会いは、初任校の頃。山口東サーク

ル代表を務める清田和幸先生に誘われ、文芸研の学習会に参加したことがきっかけだ。国語の教材分析だけでなく、学級経営の悩み事の相談もでき、的確な助言をいただいている。厳しいことを言われることもあるが、全て自分のためと思い、ずつとサークル活動を続けている。そして、二年前からは、青年学校十七期のメンバーに入り、全国の先生方と共に学んでいる。

青年学校の魅力は、志を同じくする仲間同士がつながり合えることと、文芸理論を一から学べることだ。zoom（ズーム）で開催している毎月の定例会では、自分たちが学びたい教材を持ち寄り、教材分析についての意見を出し合う。物語や説明文、詩や絵本など幅広い教材を取り上げ、認識の内容や認識の方法、典型化をどのようにするか、実際の授業をイメージしながら話し合う。また、上西信夫先生からご指導いただき、自分たちだけでは気付かないような深い分析を知ることができる。さらに、春夏秋冬の季節開催の青年学校では、理論や実践に詳しい先生方から、

西郷文芸学の教育的認識論を丁寧に教えていただける。分からないことはその場で聞けるので、大変ありがたい。でも、分かったふりをしていると、講師の先生から突っ込まれて答えられないときがあるか

ら、気を付けたい。

コロナウイルス感染拡大防止のため、今後しばらくは現在の形で青年学校を開催することになるだろう。ただ今、十八期の開催に向けて、共に学び合う仲間を募集中なので、この記事を読んで興味をもった方は、学習会にぜひ参加していただきたい。これからも、全国の先生方と定期的につながり合える学びの場があることに感謝し、学んだことを生かして、授業をよりよく変革できるように、学び続けたい。



事務局通信

★第56回全国大会に向けて、大会事務局の皆さんは、ご準備にお忙しいことと思います。今年度は、2度目のオンラインでの大会と言う事で、昨年の経験を活かし、新たな一步をまた前へと進めていきたいと思えます。すでに第1次チラシもでき、夏に向けて歩みが着々と進んでいます。また各地での国語の教室、情宣活動も始まっています。この実践研で提案レポートをしつかりと討議し、大会の成功に向けて力を合わせて取り組んでいきましょう。

★各地から聞こえてくる現場での忙しさや対応に心が痛む思いです。教師の忙しさは子どもたちにも響きます。授業の事を子どもたちの事を語り合う時間が本当に大切だと日々感じます。学年で教材研究をすれば、「国語が面白いと思いました。」「また、一緒に教材研究したいです。」という言葉をよく聞くようになりました。研修は増えているのに、学年で、同僚で授業について語り合う時間が少なくなっているのを感じて悲しさと共に同僚と子どもを真ん中に教材について語り合うことも一つの戦いだなと負けない思いも湧き上がってきました。各地での学習会や学びの報告を聞くと温かい思いになります。西郷会長の熱い思いや行動力に改めて思いを寄せました。

★文芸教育誌と授業シリーズなど、書籍の宣伝、販売、学習をお願いします。文芸研では、編集委員会を中心に、文芸研が積み重ねてきた理論と実践をより読者にわかりやすいもの、今に求められているものという観点で全サークル員のご協力をいただいて作り上げています。ただ、文芸教育誌は作ってからがとても大事です。自分たちの手で一冊でも多く読者に届けていきたいと思えます。サークル活動で、

国語の教室で、日常でなど様々な機会をとらえて運動を広げていきましょう。日々の小さな積み重ねが仲間を作っていくきます。皆様のお力添えをよろしく願います。

★年会費（一人4000円）は遅くとも全国大会には納めていただくようお願いします。

今後の予定です！

7月16日 全国委員会

7月23日 サークル代表者会議

7月30・31日 第56回全国大会

8月27日 全国代表者会議

12月26日～27日 冬の実践研

（まだ未定ですが、感染が下火になったりワクチン接種が終われば従来型の対面式の実践研を開く予定。終息せず現状と変わらないときはオンラインで実施。）



【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より

金曜日、午後7時。自宅がある十字路のご真ん中で、男性二人が何やら話をしている。ピザのデリバリーの兄ちゃんか、道を教えているのか…。いや、逆のようでした。配達する家の場所が分からず、通行人の男性に聞いているのでした。しかし、その男性にも分からないようです。

わらにもすがる思いからか、仕事帰りへロヘロの私に助けを求めてきました。バイトに励む茶髪の大學生という感じの青年でした。

場所を聞くと、聞きなれないフリース。テラス…。マンションではなく、一軒家がいくつか合体したような建物だと。見覚えがない。

住所を聞きました。だいたいの場所は分かりました。今いる場所と少し違うようです。たまたま学生時代に中華料理屋で出前の配達も担当していたので、地図を見るのは好きで、目的の家を発見するのも嗅覚が鈍っていないければ見つけれられるはず。現デリバリーが旧デリバリーに道を聞いて来たというこの状況。助けてやらなければと思いました。ただ、バイクが入れないような狭い道入っていく可能性があります。もしかしたら長期戦になるかもしれない。カバンを家の玄関

に置きました。バイクを停めてもらい、徒歩で向かうことに。

グーグルマップを頼りに、目的地に向かいました。行き止まり。…また行き止まり。自分も全然通らないシアな道をどう行けば到着するか、あれこれ行ってみました。すると、「あっ!」ここかなという建物を発見。表札が出てはいないけど、住所番号を確認すると、きっとこの扉の向こうにお客さんが、今か今かと待っているはず。兄ちゃんは、インターホンを押しました。

「はい。」

「●●さんですか。ピザリトルパーティーです。ダブルチキンセットです。」

「はい!お待ちください。」

やった!ここでした。役目を終えて、旧デリバリーの私は、細く暗い道に戻りました。「弱いロボット」ならぬ、「弱いデリバリー」だったからこそ、関わりが来ました。一緒にお客さんの家を発見する喜びに出会えました(笑)。

そんなことを思いながら、ようやく温かい自宅に入ろうかとドアノブに手をかけた、まさにその時でした!

ザッザッザッ…。激しい足音。兵隊の幽霊? 「すみません。」

「ああ。」

「ありがとうございます!」

「いえいえ、お疲れ様でした!」

礼儀正しい兄ちゃんでした。若者が頑張って働いているのが、嬉しいです。もうそんなこと言うようになった自分は、やっぱりおっちゃんですね(笑)。

(完)